

大國隆正及び五大人の佛教觀

小 泉 麟 雄

一、前 書

大東亞戰下大國隆正に關する研究は益々盛んになつて來た模様であるが、それは今日叫ばれてゐる八紘一字の大理想と彼の絶叫する「日本國は世界萬國の總本國にして、吾が天皇は地球上の總帝にまします」換言すれば、天皇中心の日本世界の建設とも云ふべき思想の相通するものがある事に起因する。而して彼の大理想は現今、海に空に陸に三位一體の皇軍の聖劍を通じて理想より現實へ、と導かれつゝある。彼は恰も豫言者の如き鋭い洞察力を以て是の如く絶叫し、皇國日本の進むべき指導原理を樹立し、幕末の眠れるかの如き民衆をして覺醒せしめ、明治維新に當つては或は獻策に申言に新日本建設の思想運動に關與したことは頗る重大なものがあつた、又門弟に在りても、福羽美靜は明治天皇の侍講となり、玉松操は岩倉具視の先生として神武の創業に復古するの大精神を根底とすべき師の説を傳へたのであつた。

併し一面、かゝる翁が一體如何なる態度で以つて當時の佛教界に臨み、佛教を如何に眺めたかと云ふ事を尋ねて行くのも、現今昭和維新下の佛教徒として必要なる事と認めるのである。

二、五大人の佛教觀

翁の學は世に所謂、津和野本學、本ツ教とを特に獨創的にして時代の思想に即して一種の學風を唱導したものであったが、元來その源流は宣長・篤胤等に存するものである。（昨今は春滿・眞淵・宣長・篤胤の四大人に加ふるに大國隆正をして國學の五大人と迄稱されて居るのである。）先ず隆正翁の佛教觀を述べるに當つて先の四大人の佛教觀をも知る必要があると思ふのである。

一體國學者と佛教、それは犬猿の間柄とも思はれる程兩者の間は不穩な空氣が流れてゐる様に感ぜられ、就中平田篤胤に至つてはその極に達するものであるが始めに荷田春滿より調べて行きたい。彼の詞の一節に

「吾道よりこれをいへば佛も神化のあとなれば捨つへきにあらねども天竺にては佛、吾朝にては神とこれを貴ぶ教なれば同躰とはいひかたし。」

とて先ず本地垂迹説を否定したが、佛教は天竺に於けるの道であり共にひとしく此の世界に於ける教である以上、吾道と時に類似するものがないでもないのであり、彼はこゝに初發心初發動の氣と一氣發動の氣の通ずるの例を擧げてゐるが、結局彼は飽迄彼の道であり、吾が國の道としては認容出來ぬと再び否定するものである。又彼の排佛辯等を讀むと彼はあまり佛教に通ずる様子なく、例へば中陰七日毎に營齊追薦する佛事に關して、

「死去の時七ケ日の數をもて弔ふこと竺土の經説にも佛書にもかつてなき也。日本書紀神代卷割記。」

と評して居るが、中陰の追福は隨願經、瑜伽論、地藏本願經、藥師經等に據つてゐるのであり明に彼の説は誤つてゐるものである。或は又彼は、只人は極樂に生れ惡人は地獄に落ちる事、末世思想、輪廻説等を彼の神道の立場より論じてゐるが要するに彼は社家としての立場に在る以上、佛法に道としての第一義を與へていないのは當然の事と思は

れるが又一面に、佛法が寂滅爲樂の教であるに對し、春滿の道たる神道に在りては生々不窮を第一とする。此處に道として佛法の肯定せられない根底があり、彼の佛教に對する態度もこゝより生れて來てゐるのである。春滿の傳記は彼が汲するに及び悉く著書等を燒かした爲に歴然としない様であるが、彼は獨學自得の人と古來より言はれ自得發明する處、極はめて多き由記されて居る處より見れば佛教に對しても獨斷的に落入つたものと思はれる。

次に賀茂眞淵に關しては前者の春滿同様に彼は左程深く佛教の研究は未だ遂けていない様に思はれる、彼は儒教に對しては全然是を退けたのであるが佛教に對してはそれ程でもなかつた模様である。

眞淵は佛教の弊害を認めるが併し、眞の佛教、誠の佛心とは斯の如きものでないと確心しそれは僧侶の墮落に依るものであり、それ等は己の慾に惹かれ佛を道具に使つて限りなき空ごとを云ひ出したものであつて、罪は僧侶に在り佛教そのものは決して悪いものではない事を明にして居るが又一面、佛教の因果應報說に對し、若しそれが成立つのであつたならば、人を澤山殺したものが大名と成り、少きものが旗本侍となり、一人をも殺さなかつたものが町人である處の矛盾を如何にして説明するや、と反問したが是は明に小乗佛教の末であつて斷じて大乘佛教の眞諦には觸れていないものである。又彼はそれと並べて因果應報の妄說が行はるゝに及んで吾が國古來の武勇の美德が害はれた事どもを論ずるが、然らば佛教傳來に依つて興つた無常無我の思想が吾が日本魂に如何なる影響を及し、如何に發展せしめたかと云ふ反問に對して、翁は如何なる態度に出づるや。と考へる時恐らく誰人と雖も一應こゝに佛教に依る影響の甚大なる事を感じせずにはいられないであらう。

本居宣長は若い頃より正住院、宗安寺の住持について教を受けたのであつたが併し、佛教々義を授つたものではな

く、前者には二十歳の時に五經の素讀、後者は和歌を學んだのに過ぎなかつたが、彼の家系は元來熱心な淨土宗の信徒であり、殊に彼の祖父祖母は共に淨土宗出家者であつたが一面彼は排佛家であつた事は次の歌に依つても分る。

「釋迦といふ大をそ人のをそ言に、をそ言そへて人惑はすも」

「佛書よめばをかききこと多み、獨り笑ひもせられけるかな」
はとびふみ

「悟るべきものもなき世をさとらんと、思ふ心ぞ迷ひなりける」

併し彼の「神の恵み」への絶對的信仰の態度はやがて一切の疑惑を捨て、佛の本願を絶對に信する、淨土宗の他力念佛の信仰とが明に相通する事は、宗報三百號誌上寶田正道氏の本居宣長の人格と淨土宗に關する論文に明瞭にされて居る。併し宣長が異國思想に對しては一面全然價值を認めず、吾が國民精神を狂はす「毒酒」と迄斷じ、鈴屋答問錄に「天地は一枚にして道もまことの道は、天地の間にたゞ一筋ならではなきことにて、其餘の道は皆正道に非ず、其正道をとらへてこれを正道と知るうへは其餘の道には、いさゝかも心をのこすべきに非ず」と言ひながら、其の反面には、先の寶田師の云はれる「宣長が年少の時から熱心な淨土宗信者の家庭に人となつて淨土宗の書なども多少讀み習ひ淨土宗の信仰に親しんでゐる、死ぬ迄同様の傾向を有してゐたことは疑はれない」と繰返へされたのは、彼も無自覺の裡に根本精神に佛教殊に淨土教的思想に感化されていた事を示すものであるのであらう。

國學者中最も甚しい排佛家として平田篤胤はあまりにも勇名である。春滿・眞淵・宣長等は因果應報說、須彌山說地獄極樂說を排撃したが併し、それ等の如き簡單な佛教論を以つて深き研究の成果と見做すわけにはゆかないであらうが、篤胤に於ては左に非ず或は富永仲基、服部天游の說に動じ、自ら研鑽を重ね、數多の經典を讀破し内容を略述

し、又漢土天竺の古傳の究明にも志したのであつた。而して後出定笑語を著し、彼獨得の毒舌で釋迦を論じ、古代印度を論じ、佛法を難し、大乘非佛説を繼唱し、佛菩薩を破す等。僧侶の墮落、佛教の吾國の風土に反する事、本地垂迹説等を一層卑近な例に就て述べ、佛教を非理妄誕として攻撃し、就中神敵二宗論に於ては一向宗日蓮宗を、又後日悟道辨には主として禪宗を攻撃したものであつた。そして最後には「何一ツ佛法が御國の爲になつたことゝてはありやせぬ」(出定笑語卷下)と迄極言したのである。併し彼は佛教ばかりではなく、儒教、俗神道等すべての他を排斥し徹底したる尊内卑外思想の持主で、後人が彼を評して傲岸不屈と云つたのも實にそうであらう。併し又一面、室田泰一氏の論等によれば、篤胤は外國の教學を一面鋭く否定しつゝも、採るべきは十分認めて、以つて神典を基礎とすべき日本學の發展を期したのであり、同氏は猶、篤胤學は排擊的かつ抱擁的な皇國學であると説かれて居る、この事は彼の來世觀に佛教が非常に影響づけて居る事等にて明に知り得るのである。

要之、國學者(殊に復古派の國學)は儒佛渡來前の日本を持つて理想國家と考へ、彼等は尙古主義、復古主義を主張したのであつた。併しかゝる思想は契沖は勿論の事、春滿でさへ獨創のものではなく、林羅山・藤原惺窩の如き儒者が、佛教は現實否定の教へであり、古代日本の道德性を崩壊したものであると論じたに初まつて居り、彼等國學者はこの思想を繼承し、更に儒教に對して皇國建設の障礙なるものとして是を排斥したのであつた。だが併し既に述べし如く廢佛運動家を以つて自らを任する彼等ではあつたがその反面、又裏面に於ては、佛教思想を取入れ、抱擁し、或は佛教的生活環境の中に養育され死ぬ迄同様の傾向を有し、或は誠の佛心は斯の如きものに非ずして、現今は僧侶の

墮落がかくしたのだと、誠の佛心を求める等。之等は傳來以來佛教が深く吾が國民間に喰ひ込み浸み込み、同化し融合され、各々の文化は其の上に建設され、その文化を論ぜんとすれば其の時代の佛教風潮を必要とする等密接不離の關係に在る事を物語るものである。然らば明治維新の御一新の文化の下の佛教を當時の國學者は如何に眺め考へたか、而して何を求め何を望んだが。國學五大人の最終者にして維新の大業に挺身した大國隆正の思想を通して觀察してみよう。

二、大國隆正の佛教觀

人間一人の思想はその師に依つて方針が立てられ、友人知人との交際に依つて鍊磨され發展し、自己の研究に依つてその度が決められるものであると僕は考へて居る。然らば隆正は如何なる人に師事したのであらう。彼は十五歳にして平田篤胤の門に入り古道學を修め、更に昌平黌にて寛政三博士の一人たる古賀精里について漢學を修め、或は増山雪齋に畫を、詩を菊池五山に、更に長崎に遊學しては吉尾權之助に理學を質し、書法を清人某に授り、音韻學を本居宣長を慕ひて村田春門の門に入り、或は歌聖人麿を尊信し、又藤田東湖、武内式部等と交はり、殊に佛教關係を觀察すれば、長崎留學中に梵書を涉獵し（文政元年二十七歳）又京都に在りては四十歳前後に勤王尼僧、歌人として名のあつた大田垣蓮月尼と交際して居た様である。

かゝる環境より生れて出たのが所謂大國學であるが、彼は豊富な學力よりして、「皇國の古傳説を元とし、五十音韻の理に徹底して、眼前の天地萬物の的證にとり、漢説、梵説、蘭説等を旁證にとりて云ふべきなり。」の如く舊來の諸説より進一步の局面を開拓し、即ち西洋學説を參酌して神道説、を主張したのである。井上哲次郎博士の言には、「隆

正は復古神道最後の人として、又西洋學說の應用者として注目すべきところがあります。」とある。又某人は是を蘭學神道として、或は「西洋かぶれ」と云ふ批評をも與へて居る。換言すれば篤胤は宣長の思想を神學的に一層發展させ、隆正は更に師說を一步すすめ、世界最新の西洋理學を多く取り入れ、その星雲說的知識や、蘭學的知識を以て解釋し、更に之を五十音圖には天地の大理が含まれてゐるとの所謂音韻學說に附會して獨自の神學的、哲學的思索を試みたのであつた。

彼の學說中特筆すべきは、その著尊王護國論にある「日本國は世界萬國の總本國なり、吾天皇は地球上の總帝にまします。」との彼の云ふ大帝爵建說の大理想と、不動の信念そのものであり換言すれば天皇中心の日本世界の建設、即ち天皇歸一の歸命心であり、是の故に大君のへにこそ死なめ省みはせじとも歌つて億兆一心天皇に歸一し奉る、それはそのまゝ彌陀に歸命する淨土信仰であり、淨土信仰の姿そのまゝが天皇歸一の信念を助長するものである。

扱て次に隆正の佛教觀を彼の著を通して大略眺めてみるに、三教一致辯には、「本教に従ふものはよろづ此心を失はず儒書佛書蘭書を悉く皆吾が古傳説の註釋末書と心得てその中の善き事を取り用ひて世の助けとなすべし。」この思想は彼の師篤胤の說をそのまゝ繼承したものと考えられる。即ち篤胤は外國の教學を一面鋭く否定しつつも、採るべきは十分認めて以つて神典を基礎とすべき日本學の發展を期した。そして外國の教學をして神典の奴とか皇道の羽翼とも考へたのであつた。又更に神理一貫書に於ては、「吾が生れし國の古傳に世界一等の大理をなはりてあることを知らず、畜臭き異國の人をのみ尊みて生涯をつくすは口惜しきことならずや。」と説き三教一致には賛成せず、三教不一致なる見解を説き前者を説く者に對しては、佛道より入つたものは佛道の意を以つて神儒を説くものであると論破して

居る、そしてそれをば和歌に詠じ、「わがくにゝもとつをしへはあるものをなどとつぐにゝみちもとむらん。」とある、又文武虚實論に置ては、外學を虚文虚武とし、且つ儒佛は偏、西教は邪、而して吾が本教の正なる旨を詳説したのであつた。次に斥儒佛一卷の中にて斥佛の章に於て、佛教の方便説を抗畫し、書が國へ佛法渡來と共に方便説が入つて來て、方便説なき神道はうづもれはてた、そして續いて、「佛道のわたり來てありしこそよかりけれ。」と論するのであるが、先述の四大人始め總ての國學者のモットーでもあつた、古代の理想國へ復れとの餘波はこゝにも現れて居る、更に筆をすゝめて本地垂迹説を破りて、彼の日本國は世界萬國の總本國なるとの見地より、佛菩薩こそそれは神みたまの分靈であるとし、

藥師佛は少彥名神の垂迹

觀音菩薩は辭代主神の垂迹

大黒天は大國主神の垂迹

辨財天は嚴島姫命の垂迹

等と挙げ本地はこなたにありとし猶附記して佛も亦吾が大道神理の一端になんあると説くものである。

次に教義内容に續いて現今の僧侶の上に筆を轉じ、「下戸ならぬものの酒のまぬはなく、大黒天をまつらぬ和尚のあらぬをおもへばその教もおもてのみにて内證は凡夫にかはらず。」と評し又、本光禪師の例を舉げて、「出世間の人もなほ名利に溺る。」と論じて居る、だが彼の門人にして隆正全集の校訂者たる野村傳四郎氏の説によれば、この著の原名は儒佛の毒をきよくはなれてと云つたそうで、率然として之を聽くと、何かなしに儒佛を目の敵にするかの如く見え

るが決して然らず。本を本とたて、中を執る方途を示し、皇國日本の國體をあらはし、日本人の日本魂をかためしめん爲と云ふのである。

以上は著述三四卷を通して斥佛の思想のあらはれた部分の略説であつたが、次に史實を通して概略を眺めて見よう。

彼は常に皇政復古は神武の古に復するを以てその理想とすべき事を強調し、北畠親房は惜しい哉、延喜天曆の跡に復するを知つて神武の古に復すべきを知らなかつたと嘆じたが、その主張空しからずして、彼の門人玉松操の獻策によつて皇政復古の大方針は神武創業に基づくべしとの大號令が發せられるに至つたのである。

慶應三年十二月二十五日、徳大寺中納言は密に神祇官に關する議を隆正に問はれたが、彼は神祇官本義を著して是に答へ、國民の信仰心を統一せんことを計つた。明治元年二月に至つては翁の多年の主張が通り神祇官が再興せられ彼の門人福羽美靜も亦神祇官判事と成つた。三月になつて隆正は徴士内國事務局權判事、次いで神祇事務判事に命ぜられ在職中の大事件、長崎浦上村の天主教徒の處分問題に當つては存念書を提出した。而して四日には病弱を以つて辭職し、三年上京の際には當世用語を宮内省に呈出した、彼はこゝに於て、葬儀は神葬式によらしむべしとか、府縣に命じて郷校を設け皇國の正道を講明すべしとか、僧侶の御大葬に奉仕するを止むべしとか、論じたが勿論佛教徒の猛烈なる反對に及びて彼は國元へ歸つて行つたのである、而して四年八月十七日病魔の爲に櫻田龜井侯邸内にて往生し赤坂靈南坂陽泉寺内に埋葬された。大正四年には賜從四位に叙せられ學事についての功績を表彰されたのである。猶後、明治五年三月に神祇省を廢して教部省を設けられ六年に教院を増上寺に開かれたが、その時の音頭とりをな

した福羽美靜は彼の高弟でもあり有名な廢佛棄釋の先驅をなした人でもあつた。

凡そ國學とは古典の客觀的歸納的註釋學と稱される如くその地盤よりして古道（神惟の道）を宣揚せんとするものにして、佛教渡來以前の古代日本を持つて理想國とし是を現實に再建せんとしたのであつた。而し佛教をして古代日本の道德の崩壞者と名付け、かゝる見地よりして彼等の尙古主義、復古主義には明に排佛を伴つた、更に又排儒も伴ひ皇國建設を障礙するものなりとして、あらゆる外國の教學をば退けたのである、併し清原貞雄氏も云はるゝ如く神惟の道とは斯の如き偏狹的なるものに非ずして、飽迄抱擁的なる同化力に富むものであると定義されて居る、而して佛教は同化され融合され、奈良佛教より平安を経て鎌倉佛教等の新日本佛教を完成し、國民に安心を與へると共に護國的教として成立したのである。かゝる見地より國學者の祖と云はる契沖の如きは「躋い哉儒教、妙なる哉佛教」と叫び偏黨を抗し神儒佛三教一致を望んだのである。

又一面ある人は佛教は出世間の教へなり、而かるに國學者の如き世間的なるものを持つて是を觀ることはその根本に於て誤つて居ると謂ふ、然し又一應何故に彼等が廢佛を唱へたか、直接の原因は勝れた佛法を民衆に傳道する媒介となる僧侶が第三者に與へた感じがよくなかつた事もあるだらう、又各々の時代に在りては各々の課題がある。その課題達成がその時代の急務であつた。勿論佛教も日本佛教なる以上、その一翼を買つて課題解決に盡力すべきだったのであるが、過去佛教は因襲的にのみ捉へられて不覺醒の裡に送つてしまつたのではなからうか、現今大東亞戰下吾人は前車の轍を觀て、蹶起一番以て活動佛教たらしむべくコペルニクスの轉回を爲さねばならぬ、廣く眼を南方に回

らせば、諸地域の小乗佛教は大乗相應の地に育まれたる吾人佛教徒の進出を待つて居るのではなからうか、千載一遇の秋來る！吾々は新しき時代の課題解決の一翼として今こそ眞の佛教を生かし、無量光にして無量壽なる皇運を扶翼し期待に斷じて沿はねばならぬのである。